全日制普通科高等学校におけるキーボード演奏未経験者への器楽指導（導入期）の取組みとその考察: 特別な支援が必要な生徒への支援を踏まえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 末石, 忠史, Sueishi, Tadafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2673

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

教職課程年報　第６号　2022 年度

実践研究報告

全日制普通科高等学校におけるキーボード演奏未経験者への器楽指導（導入期）の取組みとその考察

～特別な支援が必要な生徒への支援を踏まえて～

末　石　忠　史
Tadafumi Sueishi

1　はじめに

筆者は「音楽Ⅰ」の授業初日に、担当教員の自己紹介や授業の年間計画、評価方法、準備物、授業の約束などのガイダンスを実施し、生徒には自己紹介を兼ねたアンケート調査を実施してきた。アンケートでは、音楽や芸術への興味や関心、高校卒業後の進路など、多岐に渡った内容を聞き取っていたが、項目の一つに中学校の音楽授業で学んだことを尋ねていた。その項目は中学校以前の生徒による経験差を確認し、高等学校の学習内容と重複しないように行っていたものだが、生徒の反応はあまりよくない。

回答で一番多い記述は「合唱」であるが、合唱をした経験はあっても具体的な内容まで書かれることは少ない。机間巡視の際に「合唱」と記入した生徒に演奏した曲目を尋ねると「覚えていない」ということもあった。生徒からは「金賞をとったことかある。」や「○○ちゃんの指揮が神だった。」など、音楽科の授業経験ではなく、合唱コンクールのエピソードとして話しているものが多かった。

「歌唱」では、学習指導要領で歌唱することが決められている歌唱共通教材であってもアンケートで回答されることは少なかった。ピアノ前奏を演奏すると思い出す生徒がいるので体験はされているようである。曲目として挙がるのは「花」「浜辺の歌」「赤とんぼ」で前奏を聴いた後に歌い出す生徒もいた。

「鑑賞」もアンケートで回答されることは多くないが、「魔王」（シューベルト）、「春」（ヴィバルディ）、「交響曲第５番ハ短調」（ベートーヴェン）、「小フーガト短調」（バッハ）などの旋律や伴奏をピアノで演奏すると比較的よい反応が返ってきた。「鑑賞」について回答していない生徒にその理由を尋ねると、曲目を覚えていない場合がほとんどで、曲目を覚えていてもその教材で学習した内容はほとんど忘れてしまっていた。「鑑賞」は単に「聴いたことがある」程度の記憶に留まっている場合が多いように思えた。

「器楽」の回答はここ数年少ない。その中でも回答が多いのは「リコーダー」で、次いで「箏」になる。ここ数年は新型コロナウイルス感染症が流行したため飛沫の問題がある「リコーダー」が回答されることは少なくなった。また記述があっても「初めて吹いたリコーダー」「小さいリコーダー」と紹介されるなど、ソプラノリコーダーに関するものが多く、小学生の経験であると思われた。箏も生徒が共

通で使用するため、使用後の消毒が求められていたこともあってか、実施している学校数が減っていた。箏では「さくらさくら」を演奏した報告が多かった。

「創作」はほとんど回答されることはなく、実際には取り組まれているのは稀のようである。

以上のように、生徒達に実施した中学校の学習の取組みのアンケートの結果を参考にしつつ、高等学校学習指導要領を踏まえて年間指導計画を作成してきた。

高等学校学習指導要領第１章総則第２款４（2）［注 1］では次のよう示している。

> （2）生徒や学校の実態等に応じ、必要がある場合には、例えば次のような工夫を行い、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るようにすること。
> ア　各教科・科目の指導に当たり、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けること。
> イ　義務教育段階での学習内容の確実な定着を図りながら、必履修教科・科目の内容を十分に習得させることができるよう、その単位数を標準単位数の標準の限度を超えて増加して配当すること。

この項目では義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための指導を行うことが示されている。

この点を含め高等学校は生徒達が音楽教育を学べる最後のチャンスであり、これまで取組みが不十分なものを取り返す貴重な機会である。その機会を最大限生かすため、生徒へのアンケートの結果で把握された中学校の取組が少ない「器楽」「創作」の活動領域を中心に扱い年間計画を作成することにした。

また、高等学校学習指導要領（第１章総則第５款２（1）ア）［注 2］では学習の遅れがちな生徒に対して次のように示している。

> （6）学習の遅れがちな生徒などについては、各教科・科目等の選択、その内容の取扱いなどについて必要な配慮を行い、生徒の実態に応じ、例えば義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための指導を適宜取り入れるなど、指導内容や指導方法を工夫すること。

この項目では授業全体指導を進めながらも、個々の生徒の実態に即した指導内容・指導方法も検討することを求めている。個々の実態の中には学習の遅れがちな生徒だけではなく、特別な支援の必要な生徒もいる。その生徒達への指導の工夫もこの実践の中で検討し行ってきた。

これらを踏まえ筆者は全日制普通科で「器楽」「創作」を中心とした題材を２年間実践してきたが、本報告ではその１年目の導入期に行った指導に焦点を当て、合わせて特別な支援に必要な生徒への指導方法についても実践報告をしていく。

2 「音楽Ⅰ」の教育課程上の位置づけ

高等学校学習指導要領では、高等学校の学びの共通性を確保するため「国語」、「地理」、「歴史」、「公

民」、「数学」、「理科」、「保健体育」、「芸術」、「外国語」、「家庭」、「情報」を必履修科目（選択必履修科目を含む。）として設定している［注 3］。高等学校の卒業要件［注 4］には、この必履修科目の履修と必履修科目の履修を含む総単位修得数が 74 単位以上であることが必要となる。なお、高等学校の「単位」は 1 単位時間を 50 分とし、35 単位時間の授業を 1 単位の標準としている。「履修」は、各学校で定めた出席などの基準を満たすことで学校長により認められ、更に「履修」の基準を満たし学習の成果が十分に達成された場合には「修得」と判断され、単位が認められる。

必履修科目である「芸術」は、「音楽Ⅰ」「美術Ⅰ」「工芸Ⅰ」「書道Ⅰ」の中から一教科を選択して学ぶ。「Ⅰ」（ローマ数字）が付されている科目である「音楽Ⅰ」は高等学校において音楽を履修する最初の科目であり、中学校音楽科における学習を基礎にして、「A 表現」の「(1) 歌唱」、「(2) 器楽」、「(3) 創作」及び「B 鑑賞」についての幅広い活動を展開し、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力を育成することを目指している。［注 5］

3　本報告書の実施校について

現在勤務している高等学校は、大田区の中央に位置する全日制普通科の学校で、1 学年 5 クラス（1 学年が最大 200 名）の小規模校である。大田区内から通う生徒が一番多く 7 割近くが自転車通学で、男女比はほぼ同数。進路先は大学進学が約 20%、就職が約 20%、専門学校が約 45%である。

芸術科目は 1 年生に「芸術Ⅰ」(2 単位)、2 年生に「芸術Ⅱ」(2 単位）が設定され、それぞれ「音楽」「美術」「書道」の三つの教科の中から入学前に一つ選択し 2 年続けて受講する。例年おおよそ「音楽」40%、「美術」40%、「書道」20%の割合で生徒が受講している。

本校で「音楽Ⅰ」を選択している多くの生徒は、授業規律を守り、学習活動も促されないと取り組まないといった消極的な生徒は少ない。分からないことがあっても周りに尋ねながらも活動に参加し、和気藹々とした雰囲気がある。他の芸術の授業に比べ出席率も高く、遅刻や早退も少ない。

一方で、集中し続けて学ぶことを苦手にしている生徒もおり、単調な作業や同一の活動が続くと、飽きやすく、あきらめやすい。分からないこと自体に気がつかないままにしてしまうこともある。理由は様々あるが中学校以前の学習が十分に身についていない生徒や、学ぶこと自体に苦手意識をもっている生徒も多い。

また、特別な支援を必要とする生徒も在籍している。その生徒達は学習の困難さがあり一斉指導では理解が追いつかず活動にうまくのれなかったり、対人関係に課題がありだれかに尋ねたり切削琢磨したりすることなどを苦手にしていたりする。

そのため全体指導をしつつも、だれ一人取り残されないような配慮を授業では常に行う必要がある。

4　楽器の検討について

本校には生徒一人一台使用できる楽器として次の 4 種類が整備されていた。アンケートの結果を受け、「器楽」活動を重点的に実施することにしたが、年間授業計画を立てる前段階として、実際にどの

楽器を選択するか検討した。

①リコーダー（ソプラノからバスまで）

②ハンドベル・トーンチャイム

③クラシック・ギター

④キーボード

①リコーダーは生徒の多くが小中学校での学習歴があり、楽器の基本的な奏法がある程度身についている。また、比較的音が出しやすく身近にある楽器の一つである。一方で飛沫の問題により、新型コロナウイルス感染症の流行が顕著である時期には授業を中断せざるを得ない楽器でもある。また、生徒の中には中学校以前の経験で上手く吹けない苦手意識があることや、音を出す指を目で確認しにくいこと、和音を出せないことなどから今回は選択しなかった。

②ハンドベル・トーンチャイムは音を容易に鳴らすことができる楽器である。また、グループ学習が基本となるため協調性やチームワークなどが高まることが期待できる。一方で一人一音または二音程度までしか扱えないことや、一人だけでは演奏がしにくいことなどから今回は選択しなかった。

③クラシック・ギターは、④キーボードと同様に人気の高い楽器であり、主旋律を演奏するだけでなく、和音、リズムも表現しやすく、一人で演奏を楽しむことができる楽器である。一方で演奏の始めの段階から両手それぞれで別の動きをすること、押さえる指が見えにくいこと（生徒によっては見るために姿勢が悪くなること）、コードによっては押さえること難しいものがあること、クラシック・ギターのナイロン弦が切れやすくメンテナンスに費用も時間も必要になること、チューニングが必要なことなどから今回は選択しなかった。

④キーボードは、③クラシック・ギターと同様に旋律を演奏するだけでなく、和音、リズムも表現しやすく、一人で演奏を楽しむことができる楽器である。また、キーを押せばだれでも音を出すことができ、多様な音色やリズムなども組み合わせて演奏できる楽器である。電源コードをつなげば調律もいらず、メンテンナンスもしやすい。卒業後も手に入れやすい楽器であり、意欲があれば続けていける楽器でもあると考え、本題材ではキーボードを選択することとした。

5　題材計画について

キーボードは生徒に人気のある楽器であり、休み時間にはこれまで習い事をしたことがない生徒でも楽しそうに触っている姿を見かける。特に「猫ふんじゃった」は人気が高い。

年度当初に行ったアンケートの結果では、本校に通う生徒は個人や教室でピアノやエレクトーンを習っていた割合が少なく、多くの生徒が初めて学ぶ未経験者となっていた。習っていても小学生でやめてしまっていることもあり、中学３年生まで続けていた生徒はいなかった。「一人で何か１曲演奏してみたいという気持ち」がある生徒がいる一方で、小さい時からやっていないので演奏は絶対無理と思い込んでいる生徒もいる。

そこで題材名を「あなたも名プレーヤー～キーボード演奏を通して楽器の楽しさを味わおう～」とし

た。この題材を２年間続けて学ぶ中で、生徒たちが成長し、２年後には主体性を発揮して意欲的に練習を行い、生徒それぞれが自身の演奏に納得できることをイメージしている。１年目には、基礎的なキーボード演奏に関する知識や技能を身に付け、２年目前半にはその技能を活用して更に基礎力に磨きをかけ、グループアンサンブルにも取り組む。そして、２年生後半で生徒自身が選んだソロの自由曲を友達や先生方の見ている前でクラス内発表会を実施する計画である。

なお本報告では主に１年目前半にあたるステージⅠの実践を紹介する。

題材名「あなたも名プレーヤー～キーボード演奏を通して楽器の楽しさを味わおう～」

学年／時間数	主な学習内容・活動
ステージⅠ １年学期 （6 時間）	●キーボード演奏に関わる知識や技能を得て器楽表現を行う。 ①キーボードの準備の仕方、使い方 ②指番号 ③鍵盤の位置の確認 ④指の使い方動かし方（主に順次進行の練習） ⑤半音階 ⑥リズム変奏をする。
ステージⅡ １年２学期 （6 時間）	●キーボード演奏に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫する。 ①楽譜の読み方 ②ハ長調音階（指またぎ、指くぐり） ③♪聖者の行進（両手を別々の動かす） ④♪ジングルベル（三和音ⅠⅣⅤを弾く）
ステージⅢ ２年１学期 （6 時間）	●キーボード演奏に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、個性豊かに器楽表現をする。 ①グループアンサンブルに挑戦する。（拍の意識を持つ）♪池の雨 ②カノンを演奏する。♪カエルのうた ③指広げ（跳躍進行の練習）
ステージⅣ ２年２学期 （10 時間）	●キーボード演奏に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、個性豊かに器楽表現を創意工夫する。 ①自らの興味に応じた選曲を行い、自己の練習計画や練習方法を立てる。 ②主体的に計画や練習方法を修正しながら、キーボード発表会に向けて練習を重ねる。 ③自らの成果を発表し、自分にとって音楽をする価値について考える。
創作 ２年２学期 （1 時間）	●創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって創作表現を創意工夫する。 ①「動機」を反復、変化させて「旋律」を創作する。 ②「形式」を生かすことで音楽を発展させる仕組みを知る。

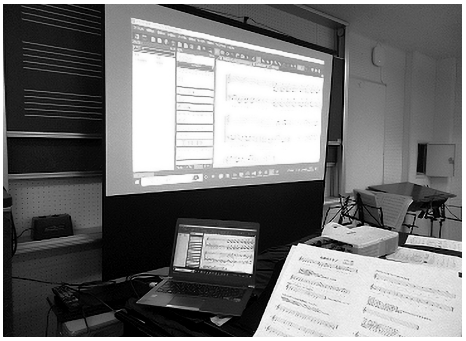
五

【使用したキーボード】

使用したキーボードはカシオ計算機のキーボード CTK-240 で鍵盤数は 49 鍵。サスティンペダルが付属されていないためダンパー機能は使用できない。打楽器音を含む 100 種類以上の音色に加え、いろいろな音楽ジャンルの 100 種類のリズムが内蔵されている。リズム伴奏をバックに演奏できる自動伴奏機能も付き、簡単な操作で和音を鳴らせる機能もある。

6　ステージⅠ（1 年目／前半）の取組について

写真１　授業の様子



ステージⅠは１年１学期にあたり、６時間の計画で、２年のキーボード演奏を進める土台となる学習を行う。このステージⅠの段階で生徒が飽きてしまったり、挫折してしまったりすると、キーボード演奏への意欲を失わせてしまう。そのため導入期にあたるステージⅠがこの学習の成否を左右するほど大切な段階となる。

計画は６時間扱いとしているが、実際はキーボードの準備、片付け、取組み後の学習シートの記入、学習のまとめなどを行うため、１時間（1 単位は 50 分）のうち演奏できる時間は 30 分程度になる。この時間で、すべての生徒がキーボード演奏する楽しさを味わいながら、技術の定着をさせられるかが、今後の学習の深まりに影響していく。学校で学んだ内容を復習させたいがほとんどの生徒の自宅にはキーボードがなく期待できない。

以下、それぞれの学習内容のねらいや配慮事項、特別な支援の必要な生徒への援助について紹介する。

6－1　キーボードの準備の仕方、使い方

キーボードの準備段階では、キーボード本体だけでなく、キーボードに取り付ける譜面台と電源アダプターの準備、延長コードを使ってコンセントから電源を引く作業がある。授業の最初の段階では、すべての準備ができ、電源を入れて音の確認をするまで 10 分近く必要になる。それだけ時間をかけても延長コードをつなげないままでいる生徒や、音が鳴らず困っているがそのままにする生徒、鳴っていないことに気付かないままで授業に臨んでしまう生徒までいる。音が出ない理由で多いものは本体のメイン電源のスイッチの場所が分からないや押すことを忘れる、電源アダプターと本体と正しく接続されていない、延長コードが正しく接続されていないがある。年に２台程度はアダプターの故障も生じることもあるが、どんな場合であってもステージⅠの段階ではすべての生徒のキーボードが鳴ることを確認するまでは授業を進めない。ステージⅠの学習を経験しないとステージⅡ以降の学習に大きな影響があるためである。

準備ができキーボードが鳴った場合でも、演奏をしないまま止まっている生徒がいる。その場合は配布しているステージⅠの楽譜の紛失や持参することを忘れたり、これまでやっていた内容を忘れてしまったりする場合もある。特に初期の段階では、困っているとやらなかったり、やれなかったりする生徒が多く、１年生で友人関係も出来上がっていないこともあり周りに助けを求められない。キーボードの準備ができなければこの題材は学習が成立しなくなることから、このステージⅠの段階では準備は生徒任せにせず、丁寧に指導を行うことが大切となる。

特別な支援の必要に生徒への援助について

①準備する道具をスライドで表示する。

②音が鳴らないことを想定して、演奏する前までに確認するポイントをスライドで表示する。

③友達同士でパートナーを決め、音が出ているか確認するようする。

④準備をする時は一つ一つの手順を分解し、一斉に行わせながら進める。

6－2　指番号

指番号は、楽譜上に最も効率の良い指の運びを知らせるために記入されており、指番号を守ることでまとまったフレーズの演奏や細かなニュアンスも表現できるようになる記号である。ステージⅠの授業では、この演奏のしやすさ以上に、明確な指示を伝えるために指番号を「共通言語」として機能させ、授業を進めていく。「中央ドの音を右手の親指で演奏します。」と指示していた場合でも、生徒が指番号を聞き慣れてくると「ド、右、1」と短い指示で全体に伝えることができるようになる。教員が丁寧に説明しようとするばかりに言葉の量が増えていき、かえってその指示が理解しにくくなることもあり、指番号の指導は重要である。この指番号の学習は遊びを交えて学ぶことで効果があがる。

写真３　①の例

写真４　②の例

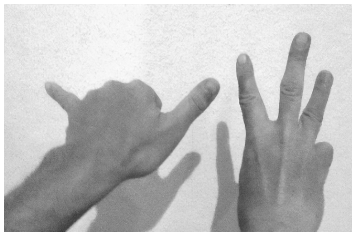
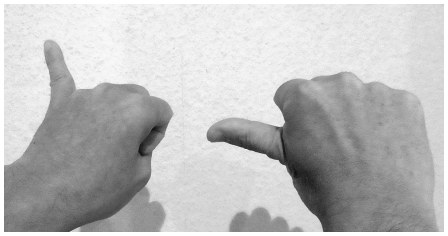


写真５　③の例



①両方の手でグーにして、「親指を出して、これが１番」と言いながら全体の前で親指だけを挙げてみせ、生徒に真似をさせる。これを小指の５番まで続けてやったあと「それでは指の運動会を開催します!」と宣言し「2番」「4番」など次々に数字を伝え、その指だけを挙げさせる。伝える数字の速さを徐々に上げていくと、途中で生徒はできなくなってしまうが、夢中になって動かない指を動かそうと努力する。速さを上げると遊びの要素が強くなるので、意欲的に取り組みやすくなる。

②次に複数の指を同時に挙げさせた活動をする。様々な組合せで実践できるが、この中で取組みやすい組合せが「1と5」と「2と3と4」である。まず両手で「1と5」、次に「2と3と4」の両方を体験させる。その後、右手「1と5」に、左手「2と3と4」を別々に準備させ、教員の「はい」という掛け声の後この左右の指番号で上げた指を左右反対にする。同時に指を動かすことに慣れていない生徒にとってはとても混乱する活動だが、これも慣れとともに徐々に速さを上げると生徒は集中して楽しむ。

③最後に「右１左５」「右２左４」…と同時に指を一本ずつ左から右へ指を動かしていくパターンの練習で締めくくる。反対に右から左へ指を動かすことも行う。この活動は難易度が高いが、生徒はこれまで指を動かす遊びと思って取り組んでいるため、難しくても挑戦する気持ちでいてくれる。このようにこの活動には「遊び」の要素を入れ込んでいくことが、持続して取り組む鍵となっている。

他にも一人で左右交互に勝っていくじゃんけん大会や指伸ばしストレッチ体操なども行っている。

特別な支援の必要に生徒への援助について

①目の前で指の番号を言いながら指の動きを見せる。

②生徒と同じ方向に並び動きを行う。

③生徒同士を鏡のようにして同じ動きをする。

④指番号や活動を見える化したシートを準備し、本人が確認できるようにする。

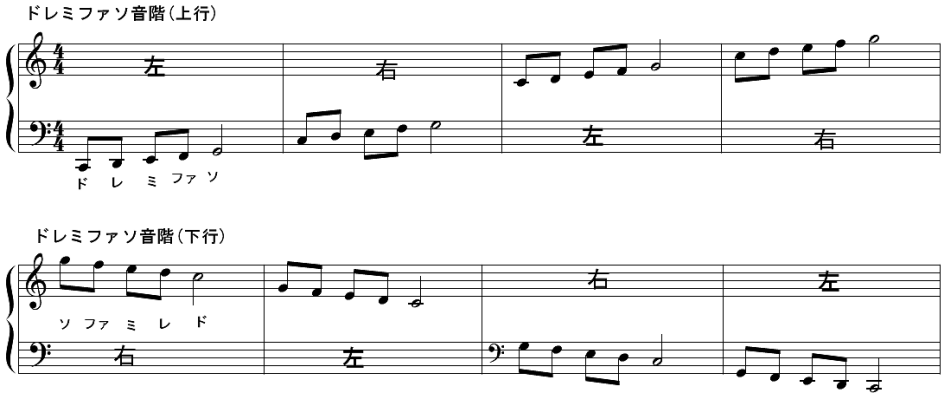
６－３　鍵盤の位置の確認

キーボード未経験者の多くが途惑うことに「どこが『ド』の位置かわからない」というものがある。49 鍵盤のうち「ド」を探すことができないだけで「難しい」と感じてしまう。そのためか本校のキーボードにも前任者がわざわざドレミファソと書いたものが多数ある。しかし、今回授業を進める前にマジックなどで書かれて消せないもの以外、例えば付箋で表示してあったものなどはすべてはずし、新設したキーボードには一切表示することをしなかった。なぜならこの表示は最初の２回程度の活動でいらなくなることが経験から分かっているからである。むしろその表示があることで、生徒は演奏するたびにいちいち楽譜と鍵盤の両方を目で確認をする作業を意識的にしてしまう。結果、音楽のイメージをもって演奏することや、表現を意識した演奏にならなくなり、単に音が正しいか、正しくないか、ということばかりに気を取られてしまう結果につながる。生徒によっては一対一で正しい音が出ていれば安心という気持ちから、いよいよ右手の人差し指だけで鍵盤を弾き始める結果にもなってしまう。このような理由からドレミファソと表記されたキーボードでは演奏の上達が見込めなくなると考えている。

通常「ド」の位置を指導する時は「黒鍵の二つのかたまりと三つのかたまりのうち、二つのかたまりの方に右人差し指、中指を置き、その時ちょうど親指がある位置がド」と教えている。この説明を聞いて多くの生徒が「ド」の位置を見つることができる。しかし、これで見つけられた「ド」は、理論として理解している状態でしかなく、演奏として働くまでに至らない。

そこで必要になるのが「ドレミファソ」のポジションにすぐ右手や左手がオートマチックに構えることができるようにすることである。音をいちいち確認しないでオートマチックにポジションにいくためには、繰り替えしの練習が必要になるが、ステージⅠでは「ドレミファソ音階（上行）」「ドレミファソ音階（下行）」がそれに該当する。

６－４　指の使い方・動かし方（主に順次進行の練習）



八

譜例１

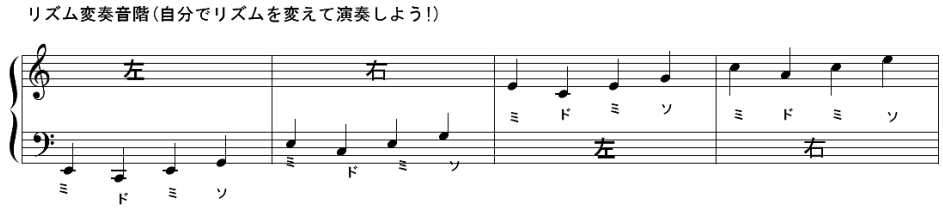
このステージⅠで使用した楽譜を最後のページに全曲掲載したが、この「ステージⅠ」の楽譜は筆者

が授業のために作成したオリジナル楽譜である。「ドレミファソ音階（上行）」など、それぞれの部分で学ぶべき意図があり、繰り返し経験することで技術の定着が図られてく。

このステージⅠのねらいは「キーボード演奏に関わる知識や技能を得て器楽表現を行う」としたが、技能を獲得するために単に指を動かせばよいということではない。ステージⅡのねらいである「キーボード演奏に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫する。」につながる前段階であり、ステージⅠでも「自己のイメージ」が育まれる内容も取り扱われる。演奏する全体のイメージがつかめなければよりよい演奏につながらないためである。

本校で使用している49鍵のキーボードには音名で「は」、「ハ」、「一点ハ」、「二点ハ」、「三点ハ」の5つの「ド」がある。そのうちドレミファソと連続して演奏できるのは「は」、「ハ」、「一点ハ」、「二点ハ」の4か所になる。そのドレミファソと演奏する音階を「は」音からでは左手、「ハ」音からは右手、「一点ハ」音は左手、「二点ハ」音は右手と両手をクロスしながら上まで上がり、下がる時には「二点ト」音から「ソファミレド」とまた両手をクロスさせながら最初の「は」音に戻ってくる。その動きを繰り返して経験していく中で、徐々に速さを変えたり、リズムを変えたりしながら変化を加えていく。ステージⅠでは順次進行のみを扱うが、この5本の指を順序よく連続して動かせるようにすることにより、演奏に必要な指使いを学ぶことができる。順次よく指を使う練習が定着していくと、旋律を弾く際に不自然な指使いをしなくなり、フレーズが突然切れるような演奏が少なくなる。また、次のステージⅡではドレミファソの順次進行だけでなく、教員がドレミファソから作った2小節の旋律を示し、それを模倣して繰り繰り返す練習をしていく。この練習ではいろいろな動機を経験することに加え、順次進行の練習以上に「ド」以外の「レ」「ミ」「ファ」「ソ」の位置も自然に獲得していくことにつながっている。

譜例2



この後に続くリズム変奏音階は、示された音符を使いながら、生徒が独自にリズムを決め、旋律を創作していく活動である。キーボード演奏の初めの段階から創作活動も合わせて体験させておくことで、創作に対する抵抗感を減らすことになる。また、自分の作品という意識が芽生え演奏することも親しみがもてるしかけになっている。記譜はさせずに毎回違う創作になるように促し、いろいろな経験を重ねていく。

九

特別な支援の必要に生徒への援助について

①最初は音名が書かれたキーボードを使用し、その後、表示のないキーボードに変更する。

②右手と左手をクロスして演奏するイメージがうまくできない生徒には、実際にクロスした腕の動きを体験させて演奏する。

③演奏する時に教員が「左手」「右手」と初めの段階ではどちらの手で演奏するか口頭で全体に伝え

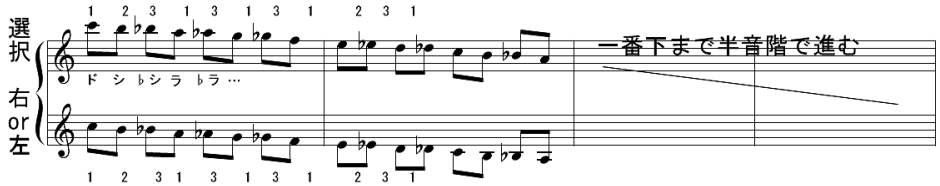
ながら演奏する。

④友達同士でグループ活動を行い教え合う活動を入れる。

⑤リズム変奏はいくつかのバリエーションの中から選んで演奏する。

６－５　半音階

譜例３



この半音階の活動は片手で一番高い音である「三点ハ」音から「は」音まで、自分なりのスピードで演奏する。親指、人差し指、中指だけで一気に上の音から下まで演奏するので大変ダイナミックで気持ちいい。この活動は「自分なりのスピートで」というのが学習の生徒の意欲を引き出すポイントになっている。これまでの①～④活動は教員の伴奏に合わせて演奏するため演奏速度の自由度はないが、この半音階では教員の伴奏が止まり（ビートだけは刻んでいるが）、自分のできるレベルの精一杯で演奏ができる。最初に教員が半音階の速い演奏を模範演奏しておくことで、それに近づけようと多くの生徒がイメージをもって努力をする。演奏できるイメージを作ることで生徒の演奏したい思いが生まれ、演奏に生かされていく。

特別な支援の必要に生徒への援助について

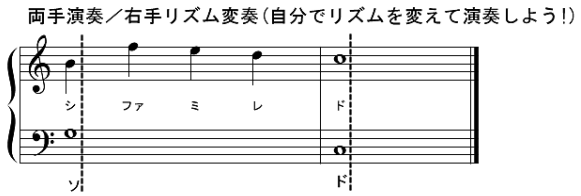
①左右どちらかの指で半音階を演奏するか決め、楽譜に指番号を記入する。

②一音一音の指番号を伝えながらすべての音を演奏する。

③一音一音を演奏するテンポを示しながら演奏する。テンポは机を指先で打ち示す。

６－６　両手演奏／右手リズム変奏

譜例４



最後の部分で初めて両手の動き必要となる。簡単そうに見える楽譜でも、未経験者にとっては片手の動きが十分に身に付いていないと両手を動かすのは難しい。その難しいと感じる経験が苦手意識にもつながってしまう。

まず右手と左手の練習を別々に十分に行い、その後両手を組み合わせていく。右手は通常のドレミファソのポジションと変わり、親指の位置を「ド」から「シ」へ移動させる。右手を移動する際、「ド」のすぐ左隣に「シ」があることに気付けてない生徒が多く、よく途惑う。生徒によっては「ド」の位置から「ドレミファソラシ」と数え、７度高い「シ」を弾く者もいる。旋律は「シ」から「ファ」の五度跳躍する旋律の動きは初めての動きになるが、これまでドレミファソ音階の練習で五度の手のポジションをキープした演奏を経験しているため、最初の「シ」の音の位置を一度確認すると、ほとんど

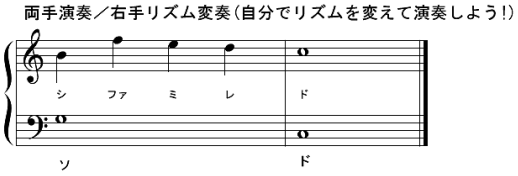
の生徒が難なく演奏することができる。また左手も同じ理由で「ソ」から「ド」の五度の演奏も容易にできる。

次に両手の演奏になるが、この部分は左右とも親指から始める。そして、その後右手だけが五度跳躍し、順次進行で降りた後、両手とも「ド」の音を同時に鳴らして演奏が終わる。この両手の動きは、指が右から左へ同一の方向へ動く形となり、最初は動かしにくそうにする生徒も同じ方向に動くことが把握されることで次第に慣れていく。また、リズムが分からないという生徒も多いが、このステージⅠでは「右手で最初の音を弾く時に左手で『ソ』を演奏し、最後は両手が同時に『ド』を演奏する。」と伝え、楽譜から読み取るリズムを意識させない。むしろリズム創作をする中で、リズムに対する経験を広げ、その感覚を身に付けさせた上で読譜につなげたいと考えている。そのため両手の演奏に慣れた生徒からこの譜例４の右手の旋律をリズム変奏するように促している。教員だけでなく、キーボードの演奏経験がある生徒が模範となって、未経験者の生徒たちも思い思いのリズムで演奏するようになり、更に作品がオリジナル化されていく。

特別な支援の必要に生徒への援助について

①十分な右手、左の練習をする。
②右に示したように右手と左手のタイミングがつかみやすいように線を書き、視覚化して示す。
③一拍をゆっくり取り練習する。
④右手でドレミをいいながら目の前で指の動きを示し、左手のタイミングをつかませる。

譜例５



7　考察・まとめ

ここまで２年間通して学ぶ「あなたも名プレーヤー～キーボード演奏を通して楽器の楽しさを味わおう～」の導入期ステージⅠの取組について紹介してきた。高等学校で学ぶ生徒達は中学生以前の学習経験もあるが、家庭での音楽経験にも差がある。そのため生徒の意欲的な取組みを促すためにも、すべての生徒が同じように学ぶ共通性を確保しつつも、それぞれのレベルに合わせた学習課題が設定されることが求められる。本研究で行ってきたことは、学習の共通性を確保し、更に意欲を引き出すための手立てや工夫についての検討である。

このステージⅠが終わるころには、キーボードの授業の準備、音の確認などは、友達同士で協力しあってスムーズに進めることができるようになっている。また、楽器の準備の様子を見計らって教員が即興で演奏するピアノ前奏を始めると、指示がなくてもオートマチックに左手が「は」音のポジションに動くようになり、その後もスムーズに両手をクロスさせながらキーボード全体を使ってダイナミックに練習に取り組むようになる。特別な支援の必要な生徒も準備から練習まで繰り返し学ぶ中で、学習手順が定着し、徐々にではあるが進んで取り組むことができるようになっている。

また、この授業で使用している「ステージⅠ」は、筆者である教員が授業ために作成した練習曲であるということにも注目してほしい。この「ステージⅠ」は、生徒達が好きなポップスやロックなどではなく、生徒の演奏技術が上達していくために作られた教材である。しかし、練習曲であっても毎回演奏

を繰り返すことで、自分なりのイメージが生まれ、意図をもった演奏となっていく。歌唱と違い歌詞からイメージが引き出されることはなく、練習を重ねながら生徒達が旋律の動きやフレーズのまとまりを感じとり、答えを見出していくのである。結果、1 学期のキーボードテストでは、レベルの差はあるが、特別な支援の必要な生徒を含むすべての生徒がそれぞれの意図をもって「ステージⅠ」を弾きこなす。生徒の感想には次のようなものがある。

・はじめてだったけど、とても楽しかった。
・何回もあきらめずに練習をするしかない。
・半音階は難しいけど、慣れてきたし上手くなった。
・クロスさせるところがかっこいい
・次のことを考えておくと演奏がうまくできる。

このように導入期にあたるステージⅠを通して、生徒はキーボード演奏に関するいろいろな演奏技術を獲得し、生徒自身が意図をもった演奏を経験することでポジティブな学習となっていく。

次のステージⅡでは既存の作品演奏に一歩踏み出しつつ、既習していない指くぐりや和音の演奏などの課題を学ぶ。習得した知識・技能が、実際の作品を演奏する段階でどのように活用されるのか体験することで、生徒にキーボード演奏をする意味をより深く感じることにつながっていく。

【注　釈】

［注 1］文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）p.26
［注 2］同上 p.30
［注 3］同上 p.23
［注 4］同上 p.20
［注 5］同上 p.141

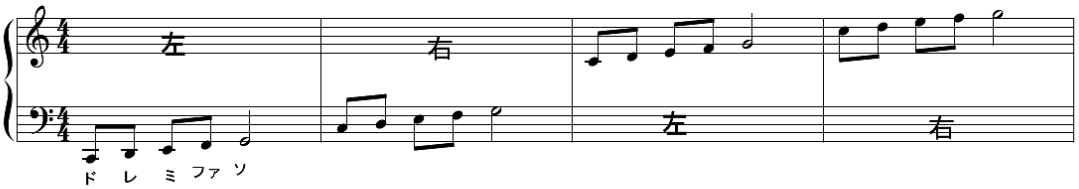
参考文献

三般優子監修　2013 年「DVD ですぐわかる　かんたんピアノの弾き方」 成美堂出版
遠藤尚美　2013 年「はじめてドレミを弾く人のためのやさしい独学ピアノ講座」 株式会社自由現代社
森真奈美著　2012 年「絶対！うまくなるピアノ 100 のコツ」 株式会社ヤマハミュージックメディア
帰山いづみ著　2010 年「好きな曲を弾くためのピアノ・レッスン 50」 株式会社自由現代社
永冨和子著　2007 年「こうすればピアノは弾ける－日本人の手のために－」 株式会社学習研究社
武石宣子　1983 年「幼児のためのたのしいリトミックレッスン」 株式会社共同音楽出版社
石井亨、江崎正剛共著　1994 年「改定新版　たのしいリトミック 1」 創芸書房

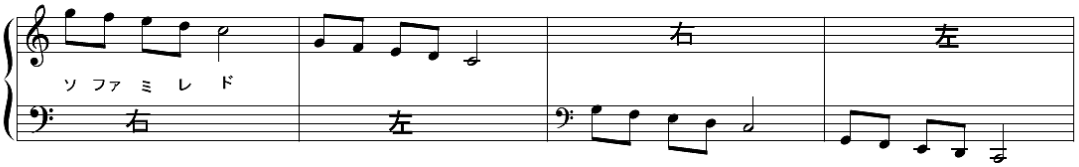
譜例 6

ステージ1

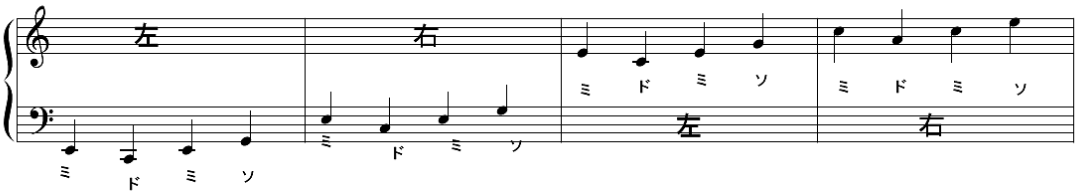
ドレミファソ音階（上行）

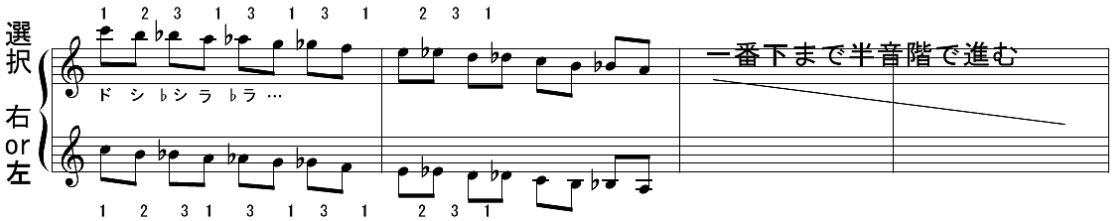
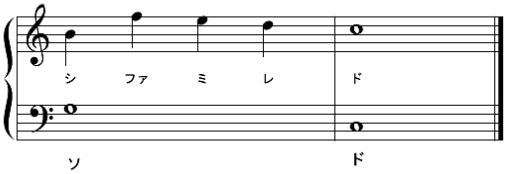


ドレミファソ音階（下行）



リズム変奏音階（自分でリズムを変えて演奏しよう!）





両手演奏／右手リズム変奏（自分でリズムを変えて演奏しよう!）